

Title	愛について : シモーヌ・ヴェイユの思索をめぐって
Sub Title	Sur l'amour chez Simone Weil
Author	今村, 純子 (Imamura, Junko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.49/50 (2009. ) ,p.211- 227
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Mélanges dédiés à la mémoire du professeur OGATA Akio = 小瀧昭夫教授追悼論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20091225-0211">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20091225-0211</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 愛について

——シモーヌ・ヴェイユの思索をめぐって——

今村純子

はじめに

シモーヌ・ヴェイユとカントとの連関に執心する論者は稀である。だが、『シモーヌ・ヴェイユの哲学——その形而上学的転回』〔原題『シモーヌ・ヴェイユの宗教形而上学』〕<sup>1)</sup>の著者ミクロス・ヴェトーは、シモーヌ・ヴェイユが自らの形而上学を練り上げるにあたり、カントとプラトンが重要な役割を果たしたことをこの著作のなかで示そうとしたと述べている<sup>2)</sup>。

本小論では、シモーヌ・ヴェイユ形而上学におけるこのカントとプラトンの二源泉という視座を保持しつつ論を展開したい。実際、シモーヌ・ヴェイユが晩年没頭していたのはプラトンであり、プラトンの註解そのものが彼女の形而上学を形成している。他方、彼女は晩年にカントを再読してはいない。そして象徴的に語るカントはつねにプラトンの衣をまとった変容を蒙ったカントである。ここに私たちはシモーヌ・ヴェイユの思想を読み解く一つの鍵を見ることができよう。彼女はこう述べている。「カントは恩寵へと導く (Kant mène à la grâce)」(OCVI-2 293)。

1) Miklos VETÖ, *La métaphysique religieuse de Simone Weil*, Paris, Vrin, 1971 / ミクロス・ヴェトー、今村純子訳『シモーヌ・ヴェイユの哲学——その形而上学的転回』慶應義塾大学出版会、2006年。

2) Miklos VETÖ, « Thèmes kantien dans la pensée de Simone Weil », *Cahiers Simone Weil*, Association pour l'étude de la pensée de Simone Weil, mars, 1985, pp. 42-49. [ミクロス・ヴェトー「シモーヌ・ヴェイユ思想におけるカント的テーマ」シモーヌ・ヴェイユ協会]

さて、本小論のもう一つの視座を示しておきたい。シモーヌ・ヴェイユが述べる自由はつねに必然性との接触における自由であり、「第二種の認識[理性]から第三種の認識[直観知]への移行が、彼女の思想の重要なファクターである。それゆえ、スピノザとの類似と差異を見極めることが、シモーヌ・ヴェイユの思想を立体的に捉えるのに有益であろうと思われる。

「もし同じ主体のうちに二つの相対立する活動が引き起こされるならば、両者が対立しなくなるまで、両者のうちに、あるいはその一方のうちに、必然的にある変化が起こらなければならないであろう」<sup>3)</sup>とスピノザは述べている。心身の合一・分離という対立はどうであろうか。他者との対立はどうであろうか。二つの命題がそれぞれにおいては矛盾なく、しかも相互に対立するとき、自由と平和は守られるのであろうか。

20世紀初頭は階級闘争を遥かにこえた「戦争」という激動の時代であった。シモーヌ・ヴェイユは、この究極の矛盾が拮抗する時代に、魂の超自然的部分と自然的部分との対立、さらに超自然的部分が自然的部分を説得する可能性を見出し、真理への統一、必然性の認識の道を切り開いている。

「自由は、人間が理性的であるという事実によって人間に属することを、そして自由は意志が持つ選択能力によって表現されることは、何人にも認められるところである」<sup>4)</sup>とジルソンは述べている。古来、キリスト教思想と折り合い、さまざまな変遷を経つつ、自由の本源であった「理性」と「意志の選択能力」という二つのファクターは、シモーヌ・ヴェイユの思想にも不可欠である。だが、彼女の独自性は、私たちの自然性においては不可能な、「恥辱 (humiliation)」に自ら同意するという意味での「己れを低くすること = 謙遜 (humilité)」の状態で見出されるということである。「十字架上のキリスト」に表象される「己れを低くすること = 謙遜」が「超自然性を解く鍵である」(SG 81、『『国家』註解』)。この一点において、決して理

3) スピノザ『エチカ』第5部 公理1。

4) Etienne Gilson, *L'esprit de la philosophie médiévale*, Paris, Vrin, 1932, p. 284. [エチエンヌ・ジルソン、服部英治郎訳『中世哲学の精神 下』筑摩書房、第15章「自由意志とキリスト教的自由」、131頁。]

性を捨て去ることなく、「神を愛し、従順であることに同意している理性的な被造物の魂の超自然的な部分」(IP 161、「ピタゴラス派の学説について」)が呼び覚まされ、神への従順に「同意する」すなわち「欲望する」自由な選択の可能性が見出される。このような欲望による自由ひらけを、シモーン・ヴェイユは、「真正なる神秘家」であり、「西洋神秘主義の父でさえある」(SG 70)とみなすプラトンのうちに見出している。自由と必然性に引き裂かれ、二律背反する矛盾を解く鍵は、プラトニズムにおける愛のうちに見出されるのである。

### 1 媒介としての「愛」——マルクスからプラトンへ

シモーン・ヴェイユは、『ギリシアの泉』における「プラトンにおける神」(SG 67-126)と、『前キリスト教的直観』における「神が降りてくること」(IP 9-121)で、プラトンの註解をおこなっている。『饗宴』(193a-d)註解のくぐりでこう述べている。「プラトンは、その神話ですべてを語ってはいない。だから、神話を敷衍することは勝手な解釈をすることではなく、むしろ、敷衍しないほうが勝手な解釈をすることになろう」(IP 48、「『饗宴』註解」)。彼女はギリシア語原文を一語一語自ら翻訳することを通して、プラトニズムの「泉」を「直観」によって捉え、それを理論的に反省し、再認識・再構成している。それは、シモーン・ヴェイユとプラトンとの間に起こる「閃光」、「亀裂」、「ずれ」を言語化する営みにほかならず、真理はこのような自己とは異なるものとの往還のうちにあらわし出されるのである。このことはシモーン・ヴェイユの思想のあり様として銘記すべきことである。

シモーン・ヴェイユは、プラトンの全著作のなかで『ティマイオス』を格別なものともみなしている。「プラトンは洞窟から抜け出し、太陽を観て、それから洞窟に戻った。『ティマイオス』は洞窟に再び戻った人間が著した書物である。だから、感じられるこの世界は、『ティマイオス』において、もはや洞窟としては描かれていない」(SG 119、「『ティマイオス』註解」)。このように、他の著作とは異なる位相にあると彼女が見なす『ティマイオス』から、『饗宴』、『国家』、『パイドロス』、『ティアテトス』といった他の著作

が捉えなおされることで、愛がどのような位相にあり、その愛によって、私たちのうちなる超自然的な部分がどのようにして自然的な部分を説得するのかが浮き彫りにされるのである。

ところで、自らのうちに真理が宿ってしまったと確信している（EL 250、「両親に宛てた手紙」）シモーン・ヴェイユ自身は、どのようにして「洞窟」を出て、そしてまた「洞窟」のなかに戻ってこようとしていたのであろうか。それは、前述の「恥辱」の経験と、その恥辱の刻印が持続する「不幸」の状態に彼女自ら身を置くことによってである。ローザ・ルクセンブルク（1871-1919）、ハンナ・アーレント（1906-1975）といったユダヤ系女性思想家たちも、シモーン・ヴェイユと同じように、国民国家体制のもとで難民的立場に立ち、「恥辱」の刻印を受け、その経験を糧にしてそれぞれ「マルクス主義批判」を出発点として、矛盾を矛盾のままに把持する「手すりなき思考」を得たと言えよう。だがここで着目したいのは、シモーン・ヴェイユがマルクス主義への傾倒を経て自ら一女工として働く「工場生活の経験」（1934-1935）をし、そこで、精神においてのみならず身体において「恥辱」の刻印を受け、それに同意する「謙遜」において「美の経験」が不可欠なものとして出てくるということである。「洞窟の神話で、太陽の直前、最後に観照される対象は月である。月は太陽の映しであり似姿である。太陽は善なので月は美であると想定するのが自然である」（IP 87、「『国家』註解」）。このような美という至高の喜びが不幸と自由を弁証法的に一致させるシモーン・ヴェイユの思想において、どのようなマルクス主義批判が展開されるのであろうか。

シモーン・ヴェイユのマルクス主義批判の論点は、マルクスが恩寵の自然的介入によって行われる例外の可能性を知らず（OL 238、「マルクス主義はあるのか？」）、超自然的な恩寵によって対立する矛盾を善へと向かわせるプラトンの弁証法を、ある特定の社会的物質〔商品〕に帰してしまったことにある（OL 205、「ロンドンでの断片」）。シモーン・ヴェイユは、マルクスが見出した「物理的ではない物質〔商品〕の観念」を「心理的な物質」にも敷衍できると考え（OL 233、「マルクス主義はあるのか？」）、まさにここにブ

ラトンとマルクスとの決定的差異、そしてプラトンの至高性を見出している。物質だけではなく思惟にも、厳密で盲目的な必然性に従うメカニズムがある。力と正義の矛盾は、心的メカニズムでは善と必然の矛盾としてあらわれ、私たちの自然性はこの矛盾を逃れ得ない。唯一、超自然性の介入のみがこの矛盾を解く。さらに、超自然的なものは私たちが生きる見える世界においては立ち現われてこないとはいえ、超自然的なものには科学以上の厳密さが必要である。その厳密さは、超自然的なものが各々の心のうちに確実なイメージとして映し出されることによって徹底される。

「たとえば、子どもが具合が悪いので学校に行けないと言ったのに、仲のよい友だちが遊びにくると途端に、遊ぶ元気が出る場合がある。このとき、心配した親は怒って、子どもが嘘をついたのだと思い、こう言う。『遊ぶ元気があるのに、どうして学校にいけないの?』。子どもは本当に真面目なのである。子どもは本当に病気だったのである。だが、仲のよい友だちに会って、遊びたい気持ちが病気を解消させてしまったのである。しかし、学校の勉強は病気を解消させるに十分な触発とはならなかったのである。」(OL 234-235、「マルクス主義学説はあるのか?」)。

子どもにも周りの人々にも、なぜ子どもの病気が治ってしまったのか分からない。病気を解消させたのは確かに子どもの生命力である。しかしこの生命力はこの子どものうちにあってこの子どもを超えている。自己ではない他者へ向かう「愛」がただ働くというだけで、病気という悪を根絶してしまうのである。このように、超自然性は目には見えないが、私たちの自然性において生きられ感じられている。この微小な一点が見出されるならば、それが支点となり世界を持ち上げることができる。そしてこの愛という私たちの心のうちなる一点だけは、どんな苛酷な必然性の支配をも逃れている「超自然的な一点」である。このような一点すなわち「ペルセポネーにおける柘榴の実や、『福音書』における芥子種や小麦の種が意味するもの」(IP 62、「『饗宴』註解」)は、はじめは目に見ええないほど小さいが、やがて天に至る木

に生長する。これが私のうちにあつて私を超えている私のうちなる愛の働きである。

シモヌ・ヴェイユは、プラトンを註解するくだりで着想を得たであろう美しくかつ的確なイメージにおいて詩と形而上学の交差点を提示している。こうした彼女は、ギリシア語の「ロゴス」のうちに「言葉」よりも「関係 (rapport)」の意味を強く読み込んでいる。そして、キリストは言葉としてあるよりも関係としてあるゆえに、「愛という媒介」となってあらわれるのである (LR 47)。私たちは、神を認識しえても、その同じ神が一般法による罪人として僕にされた一人の人間であることは認識しえない。この矛盾の理解は私たちの自然性を超えている。だが「詩的言語」においては、その矛盾が生きられ感じられている。私たちは自らの愛を真理そのものに傾けることはできない。そうではなく、愛が實在に向かったときに、そこで仮象のヴェールが剥がされ、真理があらわれ出てくるのである。

『前キリスト教的直観』における「『ティマイオス』註解」でシモヌ・ヴェイユは、世界創造から芸術創造を逆照射させ、私たちの生の創造には愛が不可欠であることを導き出し、『ティマイオス』の中心観念は、第一に、「私たちの生きる宇宙の実体は愛であるということ」(IP 37、「『ティマイオス』註解」)であり、第二に、「神の愛の映しであり、また神自身であるこの世界は、私たちが模倣すべきモデルである」(IP 39、「『ティマイオス』註解」)と結論づけている。さらに銘記すべきなのは、こうした考えは、「汎神論ではない」と繰り返し強調していることである (IP 25, 38、「『ティマイオス』註解」)。「汎神論ではない」とは、いかなる意味においても、神はこの世界を超えているということであり、神は、必然性という實在を通して、すなわち世界へ愛が向かうことによって、あらわれるということである。

シモヌ・ヴェイユとスピノザはともに、摂理 (= 必然性) のうちに超越論的理念を見出し、さらに魂に対する恩寵の働きかけに幾何学的厳密さを要求している。しかし、両者の決定的かつ根本的な差異は、プラトンから着想を得たシモヌ・ヴェイユの思想は、「汎神論ではない」ということである。

他の一切を排しても不断に至高の歓びを享受しうるものを探究し獲得する

ことが、私たちの自由に不可欠である。そのために、感性的知覚、漠然とした想像、混然とした観念や対象から知性が解放されていなければならない。知性が明晰であってはじめて必然性の認識が可能であるのは言うまでもない。だがシモーヌ・ヴェイユにおける愛は、「神への知的愛」ではない。知性は、超自然性と自然性との交差点に位置し、超自然への橋渡しをする。だが、強制にほかならない苛酷な必然性が知性によって自由に転化することはないのである。必然性が自由に転化しうるのは、苛酷な必然性として立ちあらわれてくる世界が「神の愛の映し」と感得され——それは世界へ愛が傾けられているときに限られるのであるが——、感性における唯一の超感性のあらわれでありなおかつ「至高の喜び」である「美的感情」があらわれ、必然性がそのままの苛酷さにおいて愛の対象となる場合である。ここに、個々の事象への愛からアイデアの愛に至る「プラトンの愛」(SG 102、『『パイドロス』註解])の原義が見出され、感性による自由がひらかれるのである。

そして、「汎神論ではない」とは、「私たちが友だちの名を呼ぶ時、友だちの魂を思い描いているのであり、身体を思い描いているのではない」(IP 25、『『ティマイオス』註解])ように、神はこの世界であると同時に、この世界という質料・物質 (*matière*) を超えているということである。友達の身体がそこにあるのと同じように世界はそこにある。しかし、私たちは友達の身体ではなく魂に働きかけているのと同じように、世界を通して世界を超えて私たちは目にはあらわれてこない神の魂に、私たちの愛は働きかけられるのである。

目に見えない「世界創造」は目に見える「芸術創造」との類比によって捉えられる。「プラトンは、人間の行為を取り上げるとはいえ、すでに超自然的な行為〔芸術創造〕を取り上げている」(IP 23、『『ティマイオス』註解])。芸術創造が他の創造作用と異なる超自然性を有しているのは、いかなる点にあるのであろうか。それは、芸術家は作品のモデル・範型を愛する必要があるが、職人にはその必要がないということである。時計は目的を目指して手段を組み合わせてつくられる。しかし芸術は手段を組み合わせて目的に適った状態があるが、そこには目的がない。宇宙の運行もこの「目的なき合目的



性」である芸術作品と同様に、何のために運行しているのかという目的はないにもかかわらず目的に適った心の状態があるために、神の創造であるこの世界は美しいのである。ここに愛と美との相関関係がある。

芸術家が芸術創造をする際には抽象的ないし具体的なモデル・範型を媒介としてしている。しかしこのモデル・範型に従って作品がつけられるのではない。芸術家の着想はモデル・範型と通して、モデル・範型を超えたところから得られる。このように、モデル・範型は超越しており、表象しえないが、それにもかかわらず、芸術家と作品をつなぐ何かである（IP 26、『『ティマイオス』註解』）。さらに、芸術家が芸術創造する際に傾けられた愛は、その作品を鑑賞する人々にも同様の愛をもたらす。このようにして宇宙に愛が通ってゆくのである（IP 41、『『ティマイオス』註解』）。

## 2 善と必然の矛盾をどう生きるのか

自由は奔放なものであるが、激すれば無法になり、臆すれば凋落に墮する。進歩には欲求の傾向性が必要であるが、「道德律」と「秩序」の自発的形成が並行しなければ、自由は自己崩壊するであろう。

カントは、純粋な理論理性の認識能力を省察し、自由と因果律との間に生じる「第三アンチノミー」において、理性が「自発性」という理念を創出し、自由意志が因果的法則を超克することを可能にした。さらに、実践的自由では、純粋な実践理性において、決意が感性の衝動という強制から独立であり、意志が自由によってのみ規定されるためには、行為を意志するだけでなく、「当為」が介入しなければならない。そして、実践的に自由であるとは、この当為が、「なすべきか否か」の判断を原理的になすものでなければならなかった。

一方、シモーヌ・ヴェイユは『饗宴』（197d）註解のくぐりで、「この作品に見られる教説は、哲学的反省から得られたものではなく、宗教的伝承から得られたものである」（IP 63、『『饗宴』註解』）と述べている。「愛＝エロース」は、「善への欲望」であって、「美への欲望」であるが、善でも美でもない。善は善を欲望しているその眼差しの中にしかない。そしてその眼差

しの有り様が美としてあらわれ出るので、みずからの愛の働きが自らに感じられる。このような着想を土台にしたシモーン・ヴェイユにおける意志と欲望の関係は次のようになる。すなわち、意志の働きは、畑を耕す農夫が雑草を刈り取る働きにすぎないものとなり（AD 190、「神への暗々裏の愛の諸形態」）、作物が生長してゆくためには不可欠なものであるが、作物をつくるのは「太陽の光と水」であるように、恩寵に照らされてはじめて善は生み出される。しかし、植物は光のほうに自ら身を寄せるということがなければならない。シモーン・ヴェイユ自身、自ら「光と水」をつくりだすことはできないのだという意志の無効性に直面した経験を自らの思索の根底に有している。そしてこの矛盾を解く鍵となる経験を越えた認識の拡張は、自ら光のほうに身を寄せるすなわち必然性という相貌をもつ世界のあらわれが同時に世界に美であることを感じ取る自らのうちなる「注意」であり「同意」によってなされる。だが、魂のうちに生えた雑草（＝悪）を刈り取ってゆかなければ、光に身を寄せることもできないのであり、こうした意味における意志による自己陶冶は欠かせない。この自己陶冶を経て、外的に付与されるのではなく、もともと私たちのうちにそなわっている超自然的な一点である愛が働くのである（IP 71、「『饗宴』註解」）。

『前キリスト教的直観』では、『ティマイオス』における「世界の魂」に、『饗宴』における「愛＝エロース」と『国家』における「完全な正義の人」が重ね合わされる。「世界の魂」とは愛であり、完全なる正義のモデルであり、これらは媒介の働きをなすのみならず、「どうにもならない痛み」を伴うものとして表象される。というのも、「完全な正義の人」は、正義でありながら不正義というあらわれしかもたないために、鞭打たれ磔にされ恥辱のうちに殺害されてしまうからである。このような必然性に同意しゆく「超自然的な一点」である「愛」は、どのようにして見出されるのであろうか。

「私たちの召命は一性であり、私たちの不幸は二元性の状態にあることである。不幸は、傲慢と不正義という原初の汚れによる。性差は私たちの本質的な欠陥であるこの二元性の感覚的なイメージである。肉的結合はあやまっ

た救済のあらわれである。だが二元性を超え出たいという欲望は、私たちのうちなるエロースの表徴である。エロースの神だけがこの二元性から至高善である一性へと導いてくれるであろう。この一性とは何なのか？ 言うまでもなく二人の人間の結合ではない。私たちの不幸は二元性のうちにあることである。それは、愛する人と愛される人、認識する人と認識される人、行為の内実と行為する人が分離しているということである。それは主体と客体の分離である。一性とは主体と客体が唯一無二であり、自分自身を認識し、自分自身を愛する人の状態である。」(IP 46、『饗宴』註解)

神すなわち必然性への愛によって、私たちは神の一性にあずかり、善へといたる。だが、神を愛するのは神だけであるのに、すなわち、自己愛が可能であるのは神だけであるのに、私たちは自らの想像力によって作りだした「偽りの神」に眼を向けることで、あたかも自己愛が可能であるような錯覚をもつ。それは、「道で歓び勇んで見知らぬ人に駆け寄る場合のように、離れていたために友だちを見間違えてしまったようなものである」(IP 71、『饗宴』註解)。愛は生の基盤であり、もともと自らのうちに備わっている。だが、この愛を神(＝必然性)に向けるためには、「自己のうちには善がない」ということを知らなければならず、このことは、「私たちのうちの凡庸なるものはすべて、死を余儀なくされる」(IP 71、『饗宴』註解)ので、魂の凡庸なる部分は私たちの眼差しが神以外のものに向かうよう仕向けるのである。

『饗宴』から『国家』へいたる過程において、どのようにして私たちは想像力から解き放たれ、もともと備わっている「神への愛」が働く位相にいたることができるのかが示される。「受難」の本質とは「苦しみ」ではなく「社会的威信の剥奪」である。人々の目に見えなくなるとは、「社会的威信の剥奪」の状態に置かれることであり、これは同時に無である神に近くなることである。「十字架上のキリスト」が人であるのと同時に神でありうるのは、このような形態における「無」であるからであり、ここにおいて、正義でありながら不正義であるとの最大の汚名を着せられ、鞭打たれ、磔になり、

殺されてしまう「完全なる正義の人」と「不幸」が一致するのである。ここで着目すべきなのは、「刑罰」の表象である。キリストが、殉教や政治犯ではなく、一般法による罪人としていかなる威光も見出されない状態で処刑されたことは、身体の死に先だって、自我すなわち「魂の凡庸なる部分」が死ぬことを余儀なくされていたことを意味する。このように、刑罰には、苦しみ<sup>に</sup>先だって「社会的威信の剥奪」があるために、逆説的にも、神すなわち善につらなる「無」への道行きが見出されるのである。「人間が社会的威信へのあらゆる参与を真に剥奪されるのは、刑罰の裁きがその人を社会から追放する場合に限られる」(IP 78、『『国家』註解』)。そして、「自己のうちに善がないこと」は、「悪は罪人の魂のうちにはそれと感じられずに住まわっているが、悪は罪のない不幸な人において感じられる」(AD 103、「神への愛と不幸」)ように、自らに自らの醜悪さが感じられることを通して、無となった魂において、逆説的にも、私たちのうちに本来備わっている無限小の「神への愛」が働く可能性が見出されるのである。

しかし今日私たちが「キリスト」という言葉を口にするとき、その言葉には、否応なく「復活」と二千年のキリスト教史の栄光が孕まれてしまっている。「私たちは、キリストの名のもとに、正義の实在ではなく正義と認められることを崇める危険を冒しているのである」(IP 84、『『国家』註解』)。究極の矛盾を生きる「十字架上のキリスト」であり「完全なる正義の人」において、神と人とは重なり合う。そしてここにおいてのみ、逆説的にも、私たちが必然性のただ中にありながら、必然性を逃れてゆく私たちのうちなる「超自然的な一点」が見られるのである。そしてもしこの状態になれば、私たちは、社会という「巨大な動物」(プラトン『国家』493c)が必要とするものを美しく善いと言い、必然の本質と善の本質がいかに異なるかを知ることもし、また他人に示すこともできないのである。

道徳がこの社会という「巨大な動物」の好みによって容易に変わりうることは、なによりマルクスが見抜いた重要な洞察である。だが、恩寵の介入なしに、階級闘争によってこの矛盾を乗り越えうるとみなしたところに、シモーヌ・ヴェイユはマルクスの誤謬を見る。「正義と認められること」という

正義の仮象がはぎ取られた、すなわち不正義と認められつつ正義である受難の恥辱に同意する「己を低くすること＝謙遜」において、自然性における超自然生の介入が見出され、必然性という相貌をもつ世界の魂は愛でありなおかつ苦しむ正義の人となる。

何らかの原因・観念・信仰のために迫害され、死を被った人々の苦しみは、偶像崇拜の自己欺瞞、すなわち偽りの神への愛の域を超えてはならず、「十字架上のキリスト」とは何らかかわりがない。行為において目的が見出されるかぎり、そこにはなお自我への尊敬が残り、神ないし道徳律に従順ではありえない。それゆえ、どうしても押しやられる義務の範囲内でのみ意志は効力をもつのであり、義務のない待機の状態にあって、想像力から知性が解放され、神へ従順であるかあるいは重力に従って落下する物質の従順さか、すなわち、光のほうに身を寄せるのか寄せないのかの選択の自由があらわれるのである。

「宇宙全体は、従順がぎっしりつまったかたまりにほかならない。この従順がぎっしり詰まったかたまりには、光り輝く点がちりばめられている。これらの点のひとつひとつは、神を愛し、従順であることに同意している理性的な被造物の魂の超自然的な部分である。魂の残りの部分は、ぎっしりとしたかたまりのなかに取り込まれている。理性を授けられているが、神を愛していない存在者は、ぎっしりとしていて薄暗いかたまりの断片にすぎない。彼らもまた、丸ごと全部従順であるが、それは、落下する石のように従順であるにすぎない。」(IP 161-162、「ピタゴラス派の学説について」)

「洞窟の比喩」(プラトン『国家』[514a-518b])における「洞窟」の壁に映し出された影は影であっても存在しているのであり、マリオネットも確かに存在している。だからこそ、これらを私たちは真実在と取り違えてしまうのである。「洞窟の比喩」で問題であるのは、そこが洞窟のなかつまり自我のなかであり、愛の対象が見出されえないということである。太陽のほうに向ける眼差しはあらゆる人がすでに有している。しかし洞窟の暗闇が世界だ

と思いをしている私たちがこの光の強さに耐えること、そしてこの光に眼差しを向けることが困難なのである（IP 71、『『国家』註解』）。

「自由は、自らの本性の必然性によってのみ存在し、それ自身の本性によってのみ行動しようとするものである。だが、これに反して、必然的あるいは強制されていると言われるものは、一定の仕方では存在し作用するように、他のものによって決定されるものである」<sup>5)</sup>とスピノザは述べている。シモーヌ・ヴェイユにおける必然性の認識は、理性、自由意志による合理的秩序の形成を超えたところで、自律の放棄と軌を一にする愛という微少な一点の開化によって果たされる。こうして、「媒介」とともに「どうにもならない苦しみ」を付加された愛のかたちは次のように表象されている。

「長い不在を経て、激しく愛する人に再会し、その人が私に話しかけると、その一つ一つの言葉は無限に貴重である。それは、その言葉が持つ意味のためではなく、私が愛する人のあらわれを一つ一つの音節のうちに聴くからである。たまたまそのときにとっても激しい頭痛に苦しんでいて、一つ一つの音が苦しませるとしても、苦しませる愛する人の声は、その人のあらわれを包み込むものとして、無限に愛しく、貴重なものである。」（IP 40、『『テイマイオス』註解』）

愛が働くというただそのことにおいてうちなる悪が解消してしまう。この働きは私のうちにあつて私のうちにない。このように、シモーヌ・ヴェイユが理性の概念を超えたところで、「不幸」における神への愛すなわち必然性への同意という観念を見出す独自性は着目されるべきであろう。だがこうした道行きは「きわめて険しい路のように思われ」、また、「とにかく優れたものは全て稀有であると共に困難である」<sup>6)</sup>とスピノザとともに言えよう。

5) スピノザ『エチカ』第1部 定義7。

6) スピノザ『エチカ』第5部 定理42。

### 3 数学——知と愛の合一

数学<sup>7)</sup>は、私たちがア・プリオリな認識をどこまで押し進められるかということの大きな例証である。数学はその対象と認識がア・プリオリな直観において提示される限りにおいてのみ、これを研究するところの学である。

理性をどこまで浸食してくる感性的衝動、逃れられない自然必然性の因果律から逃亡しようとする傾向性、こうした有限な私たちのうちなる無限定に限定を与えるものを、カントとともに量の図式である「数」に見出すことができる。シモーヌ・ヴェイユはさらにこの数に自然性と超自然性ととの媒介の役割を見出している。私たちはここから、不確定であるが容易に把握できる感じられる世界をめぐる思惟から、確定であるが把握できない神をめぐる思惟にいたるまで、確定性の秩序を把握できる。「実数の観念は、なんらかの数と一性との媒介によって与えられる。この観念は、算術の論証と同様に、厳密で明晰な論証の素材であり、なおかつ想像力が把握できないものである。実数の観念は、想像できない諸関係を知性に確実に把握させる。ここに、信の神秘への驚くべき導入がある」(IP 125、「ピタゴラス派の学説について」)。数学の中心に、世界のうちにあつて世界のものではない媒介の観念を捉えることで感じられる事物と神という真理とが弁証法的に一致する。このことを指してシモーヌ・ヴェイユは、「ギリシア人たちが知覚した詩」(IP 125、「ピタゴラス派の学説について」)と述べている。

「数学をただ単に、合理的で抽象的な思弁とみなすのであれば、二重の意味で間違っている。数学とはそうしたものであるが、数学はまた、自然の学そのものであつて、全く具体的な学であり、また、神秘でもある。この三つは一であり、切り離すことができない」(IP 159、「ピタゴラス派の学説につ

7) 現代数学で数学は「*les mathématiques*」と複数形で表記されるのがつねであるが、シモーヌ・ヴェイユはつねに、「*la mathématique*」と単数形で用いている。このことから現代数学は彼女の考察の対象外となっているとみなすことができよう。



いて」)。

他方で、超自然性への媒介となる受諾・同意・愛といった「高度の注意」の前段階として、シモーン・ヴェイユは、数学における「知的注意」の働きに着目している。「魂の眼は論証にはかならない」[[『エチカ』第五部、定理23、備考]とスピノザは述べている」(IP 154、「ピタゴラス派の学説について」)。「知的注意」がなければ、一と一はいつまでも並んだままである。だが、「知的注意」が足すという働きをなすことで、一と一は二になる。

「この知的注意の徳は、実際、神の叡智の似姿である。神は思惟する働きによって創造する。だが、私たちは知的注意によって創造することはない。私たちは何ものも生み出さない。しかしながら、その知的注意の働く場で、いわば、実在を震撼させるのである」(IP 155、「ピタゴラス派の学説について」)。

「知的注意」は魂の超自然的部分と自然的部分の交差点に位置しており、神が思惟する働きによって創造するのに対し、私たちは知的注意によって、不完全な実在 (demi-réalité) しか生み出さない。だが、この知的注意に受諾・同意・愛といったさらに高度の注意が加わることによって、必然性は愛の対象となる。「不幸」における最大の苦しみは、不幸のただ中であって因果関係を掴むことができないということである。苦しみの因果関係が見出されれば、この苦しみは軽減されるのである (IP 155、「ピタゴラス派の学説について」)。

時間において必然的自然法則によって、どんな出来事も他の出来事によって規定されており、現象によって意志が規定されており、意志による超越論的自由の不可能性に直面するとき、すなわち、自然必然性の因果律以外に意志が別の原因を探究できないとき、数学における「知的注意」を出発点として、さらに高度の注意である受諾・同意・愛が付け加わることによって、因果関係が把握される。そして、この世界が美しく、「純粋数学においてもま



た、必然性が美に輝いている」(IP 158、「ピタゴラス派の学説について」)のは、この高度の注意である愛の働きがあるからである。

### 結びにかえて

カントにとって本体界は善でも悪でもあり得た。だが、シモーヌ・ヴェイユにとって善の原因は、善と愛でしかあり得ない。そして、善と愛とは、弱さにほかならない。この弱さを弱さとして強さにする原理を、シモーヌ・ヴェイユはギリシア思想のうちに見出しているのである(OL 253、「マルクス主義学説はあるのか?」)。善と必然性の弁証法は、超自然性と自然性の弁証法として、「恩寵」という架け橋の介入なしにはあり得ないとギリシア人たちが洞察していたことにシモーヌ・ヴェイユは着目している。そして、プラトンの背後に、プラトン以前にはまとまった記述をみることができないピタゴラス的伝統を、キリストの受難を重ね合わせることによって洞察している。

自然性における超自然性の介入によって人間の自由が見出され、この超自然性がどのような必然性、どのような力からも逃れているために、効力をもつ。そしてこの超自然性の介入は恣意的ものではありません(OL 219、「ロンドンでの断片」)、つねに厳密さに貫かれている。農民が畑を耕すために雑草を刈り取るというイマージュが示すような理性的努力を欠くことはできない。だが、真に植物が育つためには光と水が必要だというイマージュのように、恩寵を受け入れ、私たちが本来もつ私たちのうちなる愛が育つところに、真理の路が拓かれる。そして、こうした愛の働きに欲望によって同意できる、つまり、選択できる力があらゆる人間のうちに見出されるためにそこに自由のひらけがある。シモーヌ・ヴェイユ形而上学の要諦である「対象なき欲望」とは、この欲望が愛という形をとるとき、確かに個別の事象という対象に向かっていながら、しかしその個別の事象を超越しているという意味において「対象がない」と言えるのである。ギリシア人たちの幸福の原理は、魂の諸部分の間の均衡、人間同士の間での均衡、思惟と世界の間での均衡であり、この均衡が見出されるためには、なにより「愛」という媒介が不可欠である。

シモーヌ・ヴェイユにおいて、「神は永遠の幾何学者である」<sup>8)</sup> という章句は終生離れず、ここに知と愛が重なりあう鍵が見出されるのであった。

「ペレキュデスはこう述べている。創造の際ゼウスはエロースに姿を変えた。それは、ゼウスが世界の秩序を相反するものから構成し、比例と友情へと導いて世界全体に亘ってあらゆるもののうちに同一性と一性の種を撒いたからである。[プロクロス『プラトン「ティマイオス」註解』32C〈II 54, 28 Diehl〉]」（IP 22、「『ティマイオス』註解」）

◆シモーヌ・ヴェイユの著作からの引用は以下の略記号を用い、頁数を記した。

- OC : *Œuvres complètes de Simone Weil*  
 『シモーヌ・ヴェイユ全集』
- OCI : *Premiers écrits philosophiques* (Paris, Gallimard, 1988.)  
 『第1巻 初期哲学論文集』
- OCVI-2 : *Cahiers 2 (septembre 1941-février 1942)*, (Paris, Gallimard, 1997.)  
 『第6巻 カイエ2 (1941-1942)』
- AD : *Attente de Dieu* (Paris, Fayard, 1984.) 『神を待ち望む』
- CS : *La Connaissance Surnaturelle* (Paris, Gallimard, 1950.) 『超自然的認識』
- IP : *Intuitions Pré-Chrétiennes* (Paris, Fayard, 1985.) 『前キリスト教的直観』
- LR : *Lettre à un Religieux* (Paris, Gallimard, 1950.) 『ある修道士への手紙』
- OP : *Oppression et Liberté* (Paris, Gallimard, 1955.) 『抑圧と自由』
- SG : *La Source Grecque* (Paris, Gallimard, 1963.) 『ギリシアの泉』

◆引用文中の強調は全て引用者のものである。

◆スピノザ『エチカ』からの引用は、スピノザ、畠中尚志訳『エチカ』（岩波文庫）によった。

8) シモーヌ・ヴェイユの学士論文「デカルトにおける科学と知覚」のエピローグとして掲げられている (OCI 161)。